

Title	平成二十五年度 退職教員略歴・主要業績
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2014, 54, p. 85-113
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/54051">https://hdl.handle.net/11094/54051</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 平成二十五年度 退職教員略歴・主要業績

いちかわ 市川 あきら 明 教授 アート・メディア論講座  
(アート・メディア論)

たけだ さちこ 武田佐知子 教授 共生文明論講座 (共生文明論)

なかおか なりふみ 中岡 成文 教授 哲学講座 (臨床哲学)

## 市川 明教授 略歴・主要業績

### 略 歴

- 1948年6月29日 大阪府豊中市に生まれる
- 1967年3月 大阪府立豊中高校卒業
- 1973年3月 大阪外国語大学外国語学部、卒業
- 1976年3月 大阪外国語大学外国語研究科修士課程、修了
- 1976年4月 近畿大学・教養部・助手
- 1979年4月 近畿大学・教養部・講師
- 1979年9月 ベルリン・フンボルト大学・演劇学科に留学（～1981年3月）
- 1983年4月 近畿大学・教養部・助教授
- 1988年4月 大阪外国語大学・外国語学部・助教授
- 1988年6月 大阪外国語大学・外国語学研究科・助教授
- 1996年1月 大阪外国語大学・外国語学研究科・教授（～1999年3月）
- 1996年1月 大阪外国語大学・外国語学部・教授
- 1999年4月 大阪外国語大学・言語社会研究科・教授
- 1999年5月 文部省在外研究員（長期）としてベルリン・フンボルト大学演劇学科で研究（～1999年11月）
- 2003年6月 文部省在外研究員（短期）としてミュンヘン大学演劇学科で研究（～2003年9月）
- 2006年4月 独立行政法人、大学入試センター・客員教授（～2007年3月）
- 2007年10月 大阪大学・文学研究科・教授

### 非常勤講師歴

- フンボルト大学・東アジア学科（1980年4月～1981年3月）、
- 甲南大学・教養部（1987年4月～1988年3月）
- 関西学院大学・文学部（1988年4月～1989年3月）
- 大阪大学・文学研究科・文学部（1993年4月～1995年3月、2002年4月～2004年3月）
- 岡山大学・文学部（1995年7月、集中講義）
- 宮崎大学・教育学部（1996年10月、集中講義）
- 関西大学・文学部（2002年4月～2005年3月）

名古屋大学・文学研究科・文学部（2013年12月、集中講義）

同志社大学・文学部（2012年10月～2013年3月、2013年10月～2014年3月）

## 受賞

1982年4月           ハイナー・ミュラー論文で第22回ドイツ語学文学振興会奨励賞  
2003年3月           『本当の望み』の翻訳で第5回マックス・ダウテンダイ賞

## 学会関係役員

日本演劇学会           理事（2006年4月～）  
阪神ドイツ文学会       幹事（1994年4月～2012年4月）  
日本独文学会           理事（2001年5月～2003年5月）  
日本学術振興会        科学研究費委員会専門委員（2010年1月～2010年12月）  
ドイツ語学文学振興会   評議員（2004年4月～）  
国際演劇評論家協会日本センター    関西支部長（1996年4月～2008年4月）

## 主要業績（年代順）

### 1975年

1. 「プレヒト演劇の概念—二つの演劇観をめぐって—」『Studium』4号，大阪外国語大学大学院研究室，pp.11-23，1975.
2. 「プレヒトの『コリオラン』改作」『Sprache und Kultur』10号，大阪外国語大学ドイツ語研究室，pp.28-39，1975.

### 1976年

3. 「ドラマにおける閉じた形式と開いた形式—フォルカー・クロッツの論文をめぐって—」『Studium』5号，大阪外国語大学大学院研究室，pp.18-33，1976.

### 1977年

4. 「ハイナー・ミュラーの『フィロクテート』改作」『ドイツ文学論攷』19号，阪神ドイツ文学会，pp.91-112，1977.
5. 「DDRの演劇（1）—ハイナー・ミュラー—」『外国語・外国文学研究』1号，大阪外国語大学大学院修士会，pp.31-40，1977.
6. 「P. ハックスの『プルンデルンスワイレルンの年の市』—ファーベル／素材と作者／読者・上演・観客」八木浩，丸本隆，市川明. 『研究報告』2号，ワイマル友の会，pp.3-19，（市川 pp.3-8），1977.

## 1978年

7. 「ギリシア悲劇改作—『オイディプス僭王』』『ハイナー・ミュラー—歴史と生産のドラマ』  
『外国演劇研究』1号, pp. 58-67, 1978.

## 1979年

8. 「『ヴォイツェク』における社会的なもの」『ビューヒナーと現代』吉田次郎教授退職記念  
論集, pp. 106-117, 1979.
9. “Zur Brecht-Biografie von Klaus Völker—Ein Beitrag zum Thema: Brecht-Rezeption in  
der BRD—” Protokoll 4. 4. Ferienseminar für Germanisten und Deutschlehrer. Hrsg.  
vom Goethe-Institut Osaka, pp. 9-11. 1979.

## 1980年

10. 「教育劇から『母』へ」『プレヒト—叙事詩的演劇の発展』（ドイツ文学双書5号 クヴェ  
レ会 376pp), pp. 100-130, 1980.

## 1981年

11. 「ハイナー・ミュラー —“Vorgeschichte” のドラマと生産劇』『ドイツ文学』67号, 日  
本独文学会, pp. 40-50, 1981.
12. 「ドイツの劇評家」『テアトロ』463号, テアトロ社, pp. 96-101, 1981.
13. 「東ベルリンの演劇」『悲劇喜劇』365号, 早川書房, pp. 19-24, 1981.

## 1982年

14. 「フランツ・クレッツとハイナー・ミュラー」『テアトロ』475号, テアトロ社, pp. 98  
-104, 1982.
15. 「フォルカー・ブラウンの文学世界—講演会「わが文学」より—」『視聴覚教室通信』3  
号, 近畿大学教養部視聴覚教室, pp. 45-51, 1982.

## 1984年

16. 「ピスカートアとトラー —“Hoppla, wirleben!” の1927年上演をめぐる—」『研究報告』  
9号, ワイマル友の会, pp. 26-44, 1984.
17. 『劇空間のデザイン』, OISTT日本センター, リプロポート (分担執筆pp. 68-70),  
1984.

## 1985年

18. 「ハイナー・ミュラーの『戦い』—ドイツの光景1933-45』『兩次大戦間の文学』武田昌  
一教授退職記念論集, pp. 101-122, 1985.

## 1987年

19. 『Guten Tag, Inge! (ドイツ語初級文法読本)』(共著) 郁文堂, 86pp., 1987.

20. 「ブレヒトの『ドイツ風刺詩集』について」『Sprache und Kultur』20号, 大阪外国語大学ドイツ語研究室, pp. 89-105, 1987.

#### 1988年

21. “Heiner Müllers „Vorgeschichte“ -Dramen” Zeitschrift für Germanistik 1/1988, Enzyklopädie-Verlag, pp. 59-64, 1988.

#### 1989年

22. 「ドイツあれこれ」『Sprache und Kultur』22号, 大阪外国語大学ドイツ語研究室, pp. 107-123, 1989.

#### 1990年

23. 『Keine Hoffnung, ne Hoffnung —DDRの若き詩人たち—』『Sprache und Kultur』23号, 大阪外国語大学ドイツ語研究室, pp. 79-108, 1990.
24. 『KeineBRDgung —DDR文学思いつくまま—』『ドイツ文学論攷』32号, 阪神ドイツ文学会, pp. 133-136, 1990.
25. 『ベルリン1989』（共訳）大月書店, 215pp., 1990.
26. 「ムゼーウス『奪われたヴェール』」（翻訳）松本工房, 180pp., 1990.

#### 1991年

27. 「ハイナー・ミュラーの作品について」『ゲルマーニア ベルリンの死』, 早稲田大学出版部, pp. 318-334, 1991.
28. 「ウーヴェ・コルベとシュテフェン・メンシング—東ドイツの若き詩人たち—」『現代ドイツ詩集』, 三修社, pp. 354-363, 1991.
29. 「ハイナー・ミュラー『ゲルマーニア ベルリンの死』」（共訳）早稲田大学出版部, 387pp., 1991.
30. 「フォルカー・ブラウン『自由の経験』」（翻訳）『20世紀の世界文学』月刊『新潮』臨時増刊号, pp. 660-664, 1991.
31. 『現代ドイツ詩集—東ドイツの詩人たち』（共訳）三修社, 376pp., 1991.

#### 1992年

32. 『Taros Reise nach Sachsen und Thüringen（ドイツ語中級教材）』（共著）朝日出版社, 82pp., 1992.
33. 「イマジ、壁のない世界—模索する旧東ドイツの詩人たち—」『詩人会議』30巻5号, pp. 60-67, 1992.
34. 「ドイツ「冬の旅」」『民主文学』315号, pp. 92-99, 1992.

## 1993年

35. 『Hallo, Angelika! (ドイツ語初級総合教材)』(共著) 三修社, 83pp., 1993.
36. 「レンツからプレヒトへ—プレヒトの『家庭教師』改作をめぐる—」『ドイツ文学論攷』35号, 阪神ドイツ文学会, pp. 75-97, 1993.
37. 「ドイツ統一と東ドイツの作家たち」『現代史研究』39号, 現代史研究会, pp. 21-41, 1993.
38. 「ハイナー・ミュラーの散文作品」『立命館言語文化研究』4巻5号, 立命館大学国際言語文化研究所, pp. 155-179, 1993.
39. 「シェイクスピア差異—ハイナー・ミュラーのシェイクスピア受容—」『ドイツ文学』90号, 日本独文学会, pp. 76-87, 1993.
40. 「新生ドイツの文学状況—現代文学の可能性をめぐる—」保坂一夫, 市川明, 三宅晶子, 『三田文学』29号, 三田文学会, pp. 112-143, 1992.

## 1994年

41. 『Wie geht's, Eva? (ドイツ語初級文法教材)』(共著) 同学社, 76pp., 1994.
42. 『エルベは流れる』(共訳) 同学社, 321pp., 1994.
43. 「政治演劇の季節」『民主文学』340号, pp.62-69, 1994.

## 1995年

44. 「時の扉を開いて—統一前後の東ドイツ演劇—」『世界文学』1号, 大阪外国語大学世界文学研究会, pp. 1-56, 1995.
45. 「ハイナー・ミュラーの演劇と政治」『立命館言語文化研究』6巻5 / 6号, 立命館大学国際言語文化研究所, pp. 155-179, 1995.
46. 「ヴォルフ・ビーマン『ドイツ 冬物語』」(共訳) 東ドイツ文学1号, イルムの会, pp. 5-54, 1995.
47. 『阪神大震災は演劇を変えるか』晩成書房, (分担執筆pp. 145-147), 1995.

## 1996年

48. 『Wie geht's Frank? (ドイツ語初級総合教材)』(共著) 同学社, 84pp., 1996.
49. 「変わりゆく演劇地図—統一後のドイツ演劇—」『世界文学』2号, 大阪外国語大学世界文学研究会, pp. 1-78, 1996.
50. 「死者の飛翔—ハイナー・ミュラー追想」特集「ハイナー・ミュラー」『ユリイカ』, pp. 158-165, 1996.
51. 「ハイナー・ミュラーの『ゲルマニア ベルリンの死』—Zwischen Traum und Trauma」『政策科学』別冊 辻善夫教授退任記念論文集, 立命館大学政策科学会,

pp. 39-61, 1996.

52. “Zwischen Utopie und Gewalt- Nachruf auf Heiner Müller” 『Sprache und Kultur』 29号, 大阪外国語大学ドイツ語研究室, pp. 155-158, 1996.
53. 「ハイナー・ミュラーの詩」(翻訳) 『東ドイツ文学』 2号, イルムの会, pp. 19-25, 1996.
54. 『世界の古書店Ⅲ』 丸善ライブラリー 199, (分担執筆pp. 111-117), 1996.

#### 1997年

55. 『Taros Reise an die Mosel (ドイツ語中級教材)』(共著) 朝日出版社, 73pp., 1997.
56. 「ドイツのリアリズム演劇」 『世界文学』 3号, 大阪外国語大学世界文学研究会, pp. 33-77, 1997.

#### 1998年

57. 「ブレヒトからミュラーへ—ドイツ現代演劇を研究して」 『世界地域学への招待』, 嵯峨野書院, pp. 243-260, 1998.

#### 1999年

58. 「『夜打つ太鼓』—ブレヒトのリアリズムとモダニズム—」 『世界文学』 4号, 大阪外国語大学世界文学研究会, pp. 3-33, 1999.
59. 「リアリズム演劇とはなにか」 『演劇会議』 99号, 全日本リアリズム演劇会議, pp. 14-24, 1999.
60. 「ギュンター・グラス 『はてしなき荒野』」(共訳) 大月書店, 972pp., 1999.

#### 2000年

61. 「リアリズム演劇とはなにか—ビューヒナーとブレヒトを手がかりに」 『演劇学論集』 38号, 日本演劇学会, pp. 111-130, 2000.
62. 「転換期の東ドイツ文学—語り続ける時代の証言者たち」 『世界文学』 5号, 大阪外国語大学世界文学研究会, pp. 5-53, 2000.
63. 「2000年のベルリン演劇」 『Sprache und Kultur』 33号, 大阪外国語大学ドイツ語研究室, pp. 81-87, 2000.

#### 2001年

64. “Brecht-Handbuch. Bd. 2, Gedichte” Hrsg. Jan Knopf, (共著) Metzler-Verlag 491pp., 2001.
65. 「『ゲルマーニア ベルリンの死』—ある国家と作家への追想」 『ドイツ文学』 106号, 日本独文学会, pp. 81-92, 2001.
66. 「ブレヒトの笑い 日本の笑い」 『世界文学』 6号, 大阪外国語大学世界文学研究会,



pp.1-58, 2001.

67. 「『はてしなき荒野』を旅する—ギュンター・グラスの「ドイツ統一」小説を読む」『EX ORIENTE』5号, 大阪外国語大学言語社会学会, pp. 22-66, 2001.
68. 「ベルリンからオーバーアマガウへ」『シアターアーツ』13号, 国際演劇評論家協会日本センター, 晩成書房, pp. 116-119, 2001.

#### 2002年

69. 「ドイツ演劇と笑い」『シアターアーツ』16号, 国際演劇評論家協会日本センター, 晩成書房, pp. 62-67, 2002.
70. 「フォルカー・ブラウン『本当の望み』」(共訳) 三修社, 254pp., 2002.

#### 2003年

71. 『ドイツの笑い・日本の笑い—東西の舞台を比較する』(共著) 小島康男編, 松本工房, 390pp., 2003.

#### 2004年

72. “Der gute Mensch von SezuanalsKomödie”『Sprache und Kultur』37号, 大阪外国語大学ドイツ語研究室, pp. 75-90, 2004.
73. 「ウィルソン演出の『レオンスとレーナ』—光・色・音が織りなすパノラマ—」『シアターアーツ』21号, 国際演劇評論家協会日本センター, 晩成書房, pp. 54-57, 2004.

#### 2005年

74. “Befremdendes Lachen”(共著)Hrsg. Hans-Peter Bayerdörfer, IUDICIUM-Verlag, 381pp., 2005.
75. 『世紀を超えるブレヒト』(共編著) 郁文堂, 366pp.+索引12pp., 2005.

#### 2006年

76. 『ドイツ語ステップアップ』新訂版(共著) 郁文堂, IV+198pp., 2006.
77. 「エルンスト・バルラハの演劇作品(解題)」『ドイツ表現主義の彫刻家エルンスト・バルラハ』(朝日新聞社, 294pp.), pp. 242-247, 264(独文レジュメ), 2006.
78. 「ベルリンのブレヒト祭」『シアターアーツ』29号, 国際演劇評論家協会日本センター, 晩成書房, pp. 10-17, 2006.
79. 「暗い時代からの叫び—ブレヒトの亡命中の詩」『不定期船』1号, pp. 95-102, 2006.

#### 2007年

80. 「街角にたたずむ作家たち—ベケット、ブレヒト、カフカ、マン」『不定期船』2号, pp. 86-97, 2007.
81. 「ドイツからの外大の訪問客」『Sprache und Kultur』40号, 大阪外国語大学ドイツ語研

究室, pp. 149–162, 2007年9月.

#### 2008年

82. 「歌声よ、響け！—『第九』の平和思想」『季論21』創刊号, 本の泉社, pp. 91–96, 2008.
83. 『ブレヒト 詩とソング ブレヒトと音楽1』(編著) 花伝社, 190pp., 2008年7月
84. “Musik und Bühne bei Bertolt Brecht” (編著) Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 57. JGG Tokyo, 84pp., Oktober 2008.
85. 「『ヴォイツェク』を上演する」『待兼山論叢』第42号, 文化動態論編, 大阪大学文学会, pp. 21–70, 2008年12月.
86. 「ソフィアの夏」『季論21』2号, 本の泉社, pp. 91–96, 2008.
87. 「表現主義の彫刻家・劇作家、エルンスト・バルラハ」『不定期船』3号, pp. 100–108, 2008.

#### 2009年

88. 『ブレヒト テキストと音楽—上演台本集 ブレヒトと音楽3』花伝社, 246pp., 2009年6月.
89. 『ブレヒト 音楽と舞台 ブレヒトと音楽2』(編著) 花伝社, 218pp., 2009年6月.
90. 「ジャーニーナ・カルブナリウ『ケバブ』」(翻訳)『KEBAB』(公演パンフレット), pp. 1–23, 2009年.
91. 「移民=異民の視線—『ケバブ』上演が見せたもの」『不定期船』4号, pp. 92–99, 2009年8月.
92. 「久保榮とドイツ演劇」『季論21』6号, pp. 144–153, 2009年10月.

#### 2010年

93. 「ジャーニーナ・カルブナリウ『ケバブ KEBAB』」(翻訳)『季論21』第7号, pp. 209–239, 2010年1月.
94. 「宝塚歌劇とカイザーの『二つのネクタイ』—堀正旗が残したもの—」『演劇インタラクティブ 日本×ドイツ』, 早稲田大学出版部, pp. 146–178, 2010年3月.
95. “Guten Tag, Berlin!” 郁文堂, 80pp., 2010年4月.
96. 『初級編「レアとラウラと楽しむドイツ語」』NHKラジオテキスト『まいにちドイツ語』4月号～9月号, 2010年4月～9月.
97. 「「レアとラウラ」—ドイツ統一、20年に思う」『季論21』9号, pp. 155–162, 2010年7月.
98. 「シュリンクの『朗読者』—過去の歴史と対峙する若者の苦悩—」『民主文学』, 2010年

9月号, pp. 146-151, 2010年9月.

#### 2011年

99. 「ブレヒトと日本／中国—叙事詩的演劇への道」『Arts and Media』創刊号, 大阪大学大学院文学研究科アート・メディア論研究室編, pp. 8-27, 2011年3月.
100. “Jan-Jan-Oper und Osaka Rap: Yukichi Matsumotos *Mizumachi* und *Keaton*” In: Brecht in/und Asien. The Brecht Yearbook 36, The International Brecht Society, pp. 84-93, 10. 2011.
101. “Lea und Laura” (共著), 朝日出版社, 118pp.+Glossar23pp, 2011年11月.
102. 「被災者支援の二つの公演—演劇人に今、何ができるのか」『シアターアーツ』49号, 国際演劇評論家協会日本センター, 晩成書房, pp. 87-93, 2011年12月.

#### 2012年

103. 「ブレヒトとフリッツ・ラングの“Hangmen Also Die”」『大阪大学大学院文学研究科紀要』52巻, pp. 91-132, 2012年3月.
104. 「ハイナー・ミュラーにおけるドイツとドイツ史」『Arts and Media』2号, 大阪大学大学院文学研究科アート・メディア論研究室編, pp. 4-27, 2012年3月.
105. 「第49回ベルリン演劇祭—演劇の新しい可能性を探って」『シアターアーツ』51号, 国際演劇評論家協会日本センター, 晩成書房, pp. 71-82, 2012年6月.
106. 「ブレヒトとハリウッド—映画『死刑執行人もまた死す』をめぐる」『季論21』17号, 本の泉社, pp. 142-154, 2012年7月.
107. 「セイカアートスクエア構想実現に向けて—大阪の文化活性化のために」『シアターアーツ』52号, 国際演劇評論家協会日本センター, 晩成書房, pp. 35-47, 2012年10月.

#### 2013年

108. 「ギュンター・グラスの『はてしなき荒野』について—ドイツ統一小説の特徴」『Arts and Media』3号, 大阪大学大学院文学研究科アート・メディア論研究室編, pp. 6-25, 2013年3月.
109. 『アンコールまいにちドイツ語 NHKラジオテキスト レアとラウラと楽しむドイツ語』NHK出版 (605pp.) pp. 1-415, 2013年4月.
110. “Internationales Brecht-Symposium in Okinawa. —Lietratur und der Krieg. Blick aus Deutschland, Japan und Okinawa” In: Dreigroschenheft. 20. Jahrgang, Heft, 3/2013, Wißner Verlag, Augsburg, pp. 14-16, 5. 2013.
111. 『夢を奏でたワーグナー』(監修・分担執筆) 読売新聞大阪本社企画事業部, 73pp, 2013年6月.

112. 『ワーグナーを旅する—革命と陶酔の彼方へ』(編著) 松本工房, 254pp., 2013年8月.
113. “Bertolt Brecht und Fritz Lang. Über den Film *Hangmen Also Die*” In: Bertolt Brecht und das moderne Theater. Koreanische Brecht-Gesellschaft, pp. 51-76, 8. 2013.
114. 『フリードリヒ・デュレンマット戯曲集』第二卷(共訳) 鳥影社, 686pp., 2013年9月.
115. 「ブレヒトと広島・長崎—『ガリレイの生涯』の三つの稿について」『季論21』21号, 本の泉社, pp. 134-144, 2013年10月.

## 武田佐知子教授 研究業績等一覧

### 略 歴

1963年3月	東京学芸大学附属高等学校入学
1967年3月	東京学芸大学附属高等学校卒業
1967年4月	早稲田大学第一文学部一類入学
1971年3月	早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業
1974年4月	早稲田大学大学院文学研究科史学（専攻日本史）入学
1977年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程日本史修了
1977年3月	早稲田大学大学院文学研究科史学専攻修士課程修了
1978年4月	東京都立大学へ大学院人文科学研究科博士課程入学
1985年3月	東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程修了 同 文学博士
1985年4月	大阪外国語大学助教授に就任
1997年1月	大阪外国語大学教授
2007年10月	大阪大学理事・副学長
2009年10月	大阪大学文学研究科教授
2014年3月	大阪大学を退職

### 受 賞

1985年	サントリー学芸賞 思想歴史部門
1995年	濱田青陵賞
2003年	紫綬褒章

学会関係役員 生き物文化誌学会評議員

専門分野 日本史学 服装史 女性史

### 著書（単著）

1. 『古代国家の形成と衣服制—袴と貫頭衣—』、吉川弘文館、1984年9月、341頁
2. 『信仰の王権 聖徳太子—太子像をよみとく—』、中央公論社、1993年12月、203頁

3. 『衣服で読み直す日本史』、朝日新聞社 朝日選書、1998年6月、247頁
4. 『娘が語る母の昭和』、朝日新聞社 朝日選書、2000年6月、252頁
5. 『古代日本の衣服の変遷—貴族の服装と庶民の貫頭衣—』、アートデイズ、2010年11月、CD-ROM版

#### 著書（編著）

1. 『虹の橋かかれ—武田道子書・歌遺作集—』、嵯峨野書院、1997年11月、143頁
2. 『一遍聖絵を読み解く』、吉川弘文館、1999年1月、325頁、(『一遍聖絵』に見る時衆の衣服—阿弥衣と袈裟—)、pp. 104 ~ 134)
3. 『太子信仰と天神信仰—信仰と表現の位相—』、思文閣出版、2010年5月、349頁 (『総論 太子信仰と天神信仰—問題の所在—』、pp. 3 ~ 15)
4. 『着衣する身体と女性の周縁化』、思文閣出版、2012年4月、491頁 (『民族衣装における異装と共装』、pp. 9 ~ 36)

#### 著書（共著）

1. 原始古代社会研究会編『原始古代社会研究』5、校倉書房、1979年10月 (『庚寅年譜と女子の初附』、pp. 91 ~ 144)
2. 竹内理三編『古代天皇制と社会構造』、校倉書房、1980年3月 (『律令国家による儒教的家族道徳規範の導入』、pp. 27 ~ 45)
3. 竹内理三編『律令制と古代社会』、東京堂出版、1984年6月 (『唐戸令「嫁女」条の復元に関する基礎的考察』、pp. 32 ~ 48)
4. 岸俊男編『日本の古代』7 まつりごとの展開、中央公論社、1986年12月 (『儀礼と衣服』、pp. 287 ~ 320)
5. 朝尾直弘編『日本の社会史』8、岩波書店、1987年3月 (『日本古代における民族と衣服』、pp. 12 ~ 48)
6. 巢山靖司編『国際関係論の総合的研究』、大阪外国語大学、1988年3月 (『古代における中央と地方』、pp. 164 ~ 184)
7. 森浩一編『海からみた衣と装いの文化』(シンポジウム古代日本海域の謎／森浩一編、2)、新人物往来社、1989年11月 (『古代日本海の交通と衣服』、pp. 122 ~ 138)
8. 原田平作・溝口宏平編『性のポリフォニー』、世界思想社、1990年10月 (『服飾表現の意味するもの』、pp. 228 ~ 238)
9. 日本村落史講座編集委員会編『日本村落史講座』第6巻 生活1、雄山閣、1991年11月

(「古代における都と村」、pp. 190 ~ 208)

10. 勝藤猛編『世界史上における人と人物の移動・定着をめぐる 総合的研究』平成3年度科学研究費互助金一般研究(A)研究成果報告書、大阪外国語大学、1992年3月(「二つのチカシマに関する覚え書き—古代の国際的交通をめぐる—」、pp. 13 ~ 20)
11. 一遍研究会編『一遍聖絵と中世の光景』、ありな書房、1992年12月(「笠の山」、pp. 95 ~ 114)
12. 荒野泰典・石井正敏・村井章介共編『アジアのなかの日本史』5 自意識と相互理解、東京大学出版会、1993年1月(「律令国家と蝦夷の衣服」、pp. 143 ~ 173)
13. 西垣晴次先生退官記念宗教史・地方史論纂編集委員会編、『西垣晴次先生退官記念 宗教史・地方史論纂』、刀水書房、1994年3月(「大江親通の巡礼記二題」、pp. 79 ~ 98)
14. 竹内実・西川長夫編『比較文化キーワード』1、サイマル出版、1994年4月(「衣装—羞恥心・共同体・異文化」、pp. 25 ~ 31)
15. 脇田晴子・S. B. ハンレー共編、『ジェンダーの日本史』上巻、東京大学出版会、1994年11月(「男装と女装—その日本の特質と衣服制—」、pp. 217 ~ 251)
16. 門脇禎二編『日本古代国家の展開』下巻、思文閣、1995年11月(「大仏開眼会における孝謙天皇の礼冠について」、pp. 176 ~ 200)
17. 大阪外国語大学比較文化講座編、『比較文化・知の源泉—歴史・思想・社会—』、大阪外国語大学、1996年3月(「明治天皇の御真影と男性美」、pp. 39 ~ 57)
18. 大阪外国語大学女性研究者ネットワーク編(代表武田佐知子)『女の性と生』、嵯峨野書院、1997年9月(「男装の女帝—百人一首の持統天皇—」、pp. 146 ~ 195)
19. 吉田晶編『日本古代の国家と村落』、塙書房、1998年7月(「奉翳美人の男装について」、pp. 315 ~ 342)
20. *Women and class in Japanese history*, edited by Hitomi Tonomura, Anne Walthall, and Wakita Haruko, Michigan monograph series in Japanese studies, 25, Center for Japanese Studies, the University of Michigan, April, 1999 (“Trousers : Status and Gender in Ancient Dress Codes”, pp. 53 ~ 65)
21. *Gender and Japanese History*, Vol.1, Osaka University Press, August, 1999 (“Menswear, Womenswear Distinctive Features of the Japanese Sartorial System”, pp. 187 ~ 211)
22. 佐原真・田中琢共編『古代史の論点』6 日本人の起源と地域性、小学館、1999年12月(「男装の女王・卑弥呼」、pp. 214 ~ 234)
23. 脇田晴子・アンヌ・ブッシー共編『アイデンティティ・周縁・媒介』、吉川弘文館、2000年8月(「男装と王権」、pp. 213 ~ 227)

24. 岸和田市・岸和田市教育委員会編『考古学の学際的研究 濱田青陵賞受賞者記念論文集 ①、昭和堂、2001年1月（「大化の冠位制について—吉士長丹像との関連で—」、pp. 143～166）
25. 大阪天満宮文化研究所編『天神祭—火と水の都市祭礼—』、思文閣出版、2001年10月（「天神祭の起源をさぐる」、pp. 191～223）
26. *Identités, marges, médiations : regards croisés sur la société japonaise : actes des trois tables rondes franco-japonaises, 1997-1998*, édités par Jean-Pierre Berthon, Anne Bouchy, Pierre F. Souyri, Études thématiques, 10, École française d'Extrême-Orient, 2001（“Costume masculine et monarchie”, pp. 253～263）
27. メコン河集水域における自然と文化の相互関係にかんする生態史的総合研究会編『メコン河集水域における自然と文化の相互関係にかんする生態史的総合研究 平成11年度～平成13年度 科学研究費補助金（基盤研究A2）研究成果報告書』、大阪外国語大学、2002年3月（「中国西南部ミャオ族の民族衣装の消長」、pp. 57～77）
28. 奈良文化財研究所編『鍔帯をめぐる諸問題』、奈良文化財研究所、2002年3月（「律令衣服制と帯」、pp. 1～10）
29. 網野善彦・田中登・他3名共編『岩波講座 天皇と王権を考える』第9巻 生活世界とフォークロア、岩波書店、2003年2月（「古代天皇の冠と衣服—中国衣服制の継受をめぐって—」、pp. 75～104）
30. 小川良祐・狩野久・吉村武彦共編『ワカタケル大王とその時代』、山川出版社、2003年5月（「王権と衣服」、pp. 191～234）
31. 井上勲編『日本の時代史』29 日本史の環境、吉川弘文館、2004年10月（「服飾と制度—冠位から位階へ—」、pp. 308～327）
32. 吉村武彦編『律令制国家と古代社会』、塙書房、2005年5月、（東野治之・武田佐知子・他9名共著「古代環日本海交通と滄足柵」、pp. 123～144）
33. 脇田晴子編『周縁文化と身分制』思文閣、2005年4月（「集団帰属性と衣服」、pp. 3～31）
34. *Capital and countryside in Japan, 300-1180 : Japanese historians in English*, edited by Joan R. Piggott, Cornell East Asia series, no. 129, East Asia Program, Cornell University, June, 2006（‘Roads in the Tenno - centered Polity’, pp. 147～165）
35. 大阪外国語大学グローバル・ダイアログ研究会編『痛みと怒り 圧政を生き抜いた女性のオーラル・ヒストリー』、明石書店、2006年5月（「はじめに—女の語り」、pp. 5～7）
36. 日高敏隆・白幡洋三郎編『人はなぜ花を愛でるのか』第6章、八坂書房、2007年3月（「花をまとい、花を贈るといふこと」、pp. 130～155）



37. 上田正昭・千田稔他『聖徳太子の歴史を読む』第4章第3節、文英堂、2008年2月  
（『唐本御影』は聖徳太子像か）、pp. 298～319）
38. 河添房江編『王朝文学と服飾・容飾』、平安文学と隣接諸学9、竹林舎、2010年5月  
（「対談 王朝文学と服飾」、pp. 8～20）

#### (学術論文)

1. 「記紀雷神仰についての一考察」、東京学芸大学附属大泉中学校『研究集録』第13号、  
1972年3月、pp. 152～162
2. 「『不改常典』について」、『日本歴史』第309号、1974年3月、pp. 54～66
3. 「子女の帰属に関する一試論」、早稲田大学文学部『史観』第98号、1978年3月、pp. 43  
～57
4. 「奈良時代における袴に先行する衣服形態について—記紀の服制解明のてがかりのため  
に—」、『女子美術大学紀要』第10号、1980年3月、pp. 41～67
5. 「律令制下の農民の衣服について—〈脛〉身体名称からの服装史の試み—」、『女子美術  
大学紀要』第11号、1981年3月、pp. 39～64
6. 「推古朝以前の衣服形態についての覚え書き—埴輪男子像の衣服の理解へむけて—」、『女  
子美術大学紀要』第12号、1982年3月、pp. 79～94
7. 「古代国家の形成と身分と標識」、『歴史学研究』1982年度大会報告別冊、1982年11月、  
pp. 28～40
8. 「中国衣服制と冠位十二階」、『女子美術大学紀要』第13号、1983年3月、pp. 11～40
9. 「『魏志』倭人伝の衣服について—『横幅』衣・『貫頭』衣の位相—」、『女子美術大学紀要』  
第14号、1984年3月、pp. 42～68
10. 「道と古代国家」、大阪外国語大学法経学会『評林』第15号、1988年4月、pp. 69～88
11. 「古代における道と国家」、『ヒストリア』第125号、1989年12月、pp. 116～133
12. 「聖徳太子像と後醍醐天皇—勝鬘経講讃図の異形性をめぐって—」、『アジア学論叢』創  
刊号、1991年3月、pp. 71～89
13. 「異形の聖徳太子」、『歴史評論』5月号、1991年5月、pp. 23～30
14. 「中世法隆寺と「唐本御影」—阿佐太子仮託説の意図—」、『日本史研究』第347号、1991  
年7月、pp. 1～22
15. 「冠位から位階へ—古代官僚制と冠位制」、『日本学』第18号 特集 律令制と官僚制、  
1991年11月、pp. 48～56
16. 「埴輪の衣服について」、『月刊考古学ジャーナル』第357号、1993年2月、pp. 26～29

17. 「民族衣装のゆくえ—中国西南部少数民族の世界から—」、大阪外国語大学言語社会学会『EXORIENTE』第4号、2000年12月、pp. 23～52
18. 「民族衣装のゆくえ—中国西南部少数民族の世界から—」、『メコン河集水域における自然と文化の相互関係にかんする生態史的総合研究：研究課題番号11691019、平成11年度～平成13年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（2））研究成果報告書』、2002年3月、pp. 57～77
19. “La noblesse de l’époque de Heian : formes de vêtements, formes d’amour.” *Autour du Genji monogatari*, numéro préparé par Terada Sumie, (Cipango : cahiers d’études japonaises/Centre d’études japonaises, Institut national des langues et civilisations orientales, no hors-sér.), Publications Langues O’, 2008, pp. 277～289
20. 「つくられた男性 明治天皇のご真影と男性美」『新編日本のフェミニズム 女性史・ジェンダー史』巻10、2009年2月、pp. 219～236
21. 「前近代日本における貴族の衣服形態と、愛のかたちの相関について—源氏物語を素材として—」『国際シンポジウム2010 報告・論文集「着衣する身体と異性装一日・タイの比較」』、2010年3月、pp. 1～8
22. 「古代浴衣復元のための覚え書き」、『「歴史における周縁と共生—疫病・触穢思想・女人結界・除災儀礼」研究成果論集』2012年3月、pp. 131～142
23. 「聖徳太子の造形—仏教文化史からみる聖徳太子—」、『藝林』第61巻第1号、2012年4月、pp. 77～119
24. 「西馬音内の盆踊り」、盛岡大学日本文学科『東北文学の世界』第21号、2013年3月、pp. 79～82

#### (研究報告書)

1. 『ジェンダーの世界史を読む』—平成15年度大阪外国語大学特別教育学内研究経費：「ジェンダーの世界史」構築のための基礎的研究」研究成果報告書—（代表武田佐知子）、2004年、武田佐知子編、109頁、大阪外国語大学
2. 『痛み、怒り、癒し～暴力と女性の語り』—16年度大阪外国語大学特別研究費Ⅱ：「グローバル・ダイアログ：痛み、怒り、癒し～暴力と語りに関する地域間研究」プロジェクト研究成果報告書—（代表武田佐知子）、2005年、武田佐知子編、114頁、大阪外国語大学グローバル・ダイアログ研究会
3. 『トラウマ的記憶の社会史』—2005年度大阪外国語大学特別研究費Ⅱ：「トラウマ的記憶の社会史Ⅱ」プロジェクト 研究成果報告書—（代表武田佐知子）、2006年3月、武田

佐知子編、43頁、大阪外国語大学グローバル・ダイアログ研究会

4. 『太子信仰と天神信仰の比較史的研究』—信仰と表現の位相—科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書 (代表武田佐知子)、252頁、2006年、武田佐知子編、大阪外国語大学
5. 『トラウマ的記憶の社会史 ～民衆のトラウマと歴史参加』—平成18年度大阪外国語大学特別研究費Ⅱ「トラウマ的記憶の社会史Ⅱ」プロジェクト研究成果報告書— (代表武田佐知子)、2007年、武田佐知子編、98頁、大阪外国語大学グローバル・ダイアログ研究会
6. 『着衣する身体の政治学／周縁化される『伝統』の共鳴』—科学研究費補助金基盤研究 (A) 「着衣する身体と女性の周縁化」(研究代表者：武田佐知子) 報告書、2009年3月、武田佐知子・宮原暁編、126頁 (「民族衣装—そのうつろうもの『着衣する身体』の政治学—肌に触れる知の発見』によせて)、pp. 1 ～ 4)

#### (その他)

1. 「袴と貫頭衣 日本古代の衣服について」、ポーラ文化研究所『IS : Panoramic magazine : Intellect & sensitivity』21号、pp. 42 ～ 45、1983年6月
2. 「衣」、新人物往来社『歴史読本』9月号、pp. 72 ～ 78、1983年9月
3. 「衣冠制に見る古代の国際関係」、新人物往来社『歴史読本』臨時増刊号、pp. 312 ～ 319、1983年9月
4. 「古代の戸籍と婚姻」、雄山閣出版『歴史公論』11月号、pp. 108 ～ 110、1984年11月
5. 「右衽」と「左衽」、中央公論新社『中央公論』5月号、pp. 40 ～ 42、1986年5月
6. 「衣服の男女差」、脇田晴子・林玲子・永原和子共編・吉川弘文館『日本女性史』、pp. 61 ～ 65、1987年8月
7. 「『古代国家の形成と衣服制』にいたるまで」、早稲田大学校友会『早稲田学報』、pp. 36 ～ 39、1987年1月
8. 「胸がチラリ、貫頭衣を着る民族」、朝日新聞社『週刊朝日』巻頭グラビア4頁、1988年12月
9. 「白褲ヤオ族の衣服」、日本ナショナルトラスト『雲南・貴州と古代日本のルーツ 季刊自然と文化』24 春季号、pp. 24 ～ 25、1989年3月
10. 「藤ノ木古墳のよそおい」、社団法人日本理容美容教育センター『研修紀要』第74号、pp. 23 ～ 25、1989年4月
11. 「中国の民族衣装を紀行する」、中央公論新社『中央公論』5月号、pp. 332 ～ 341、

1989年 5月

12. 「石母田先生の思い出」、岩波書店『石母田正著作集 第10巻』月報9、pp.1～2、1989年8月
13. 「即位礼の色」、東洋インキ製造『東洋インキ NEWS』NO.67 特集：歴史の色彩、pp.12～13、1991年6月
14. 「装う」、社団法人日本理容『研修紀要』第95号、社団法人日本理容美容教育センター、p.1、1992年4月
15. 「古代日本人の衣服と世界観」、朝日選書『古代史を語る』、pp.159～175、1992年5月
16. 「古代日本 死をめぐるおおらかな泣き」、朝日新聞社『なぜ泣くの 涙と泣きの大研究』、pp.142～146、1993年10月
17. 「時空を越えて生きる太子 太子信仰」、出版文化社『いま甦る聖徳太子』、pp.48～59、1994年5月
18. 「花をまとう、花を贈る」、朝日新聞社『週刊朝日百科 植物の世界』12号、特集「花の発見」、pp.8～12、1994年7月
19. 「装いの標」、朝日新聞学芸部編・朝日新聞社『中世の光景』、pp.272～289、1994年10月
20. 「御廟・磯長山 叡福寺」、監修、大阪書籍株式会社『まんが 聖徳太子』、全110頁、1995年1月
21. 「日本古代史「異性装に」こだわる」、朝日新聞社『AERA MOOK10 歴史学がわかる』、pp.30～31、1995年10月
22. 「時代に応じたさまざまな顔」、公文教育研究会『季刊』文 40、1995年夏号、特集：聖徳太子、pp.9～11、1995年7月
23. 「男装埴輪想」、埴輪研究会『はにわのとも』第8号、1996年7月
24. 「異性装—東洋と西洋のはざままで—」、女性史学編集委員会『女性史学：年報』1996年第6号、女性史総合研究会、pp.120～121、1996年7月
25. 「ズボンとスカート・男と女」、大阪外国語大学女性研究者ネットワーク編（代表武田佐知子）・嵯峨野書院『地球のおんなたち—女から女へ 女を語る—』、pp.2～9、1996年5月
26. 「タフな女の子たちに気づいていますか」、日本実業出版社『経営者会報 攻』8月号、pp.68～69、1996年8月
27. 「天神祭・天満宮—母の日記から—」、大阪天満宮社報『てんまてんじん』第32号、pp.4～5、1997年4月
28. 「松井道子の日記から—女高師、そして大阪—」、佐保会大阪支部『佐保会大阪支部たよ

- り』第42号、pp.6～13、1997年4月
29. 「卑弥呼は男装していたか?」、住友グループ広報委員会『すみとも』春号、pp.6～7、1998年4月
  30. 「古代人の衣服を考える—ジェンダーと衣服の視点から」、開隆堂『ACCESS』4号、pp.2～3、1998年4月
  31. 「竹内理三先生の思い出」、竹内理三 人と学問編集委員会編・東京堂出版『竹内理三人と学問』、1998年3月
  32. 「男装の王権」、社団法人日本利用美容教育センター『研修紀要』、pp.24～27、1999年7月
  33. 「卑弥呼はどんな服装をしていたか」、吉田晶編・文英堂『卑弥呼は大和に眠るか—邪馬台国の実像を追って』、pp.68～86、1999年10月
  34. 「母の持っていた百人一首」、大和書房『東アジアの古代文化』第100号、1999年8月
  35. 「身分と色」、東洋インキ製造『東洋インキ NEWS』vol.77、pp.12～13、2000年6月
  36. 「大学における女性学の試み—大阪外国語大学」、明石書店『女性学教育の挑戦—理論と実践』、pp.114～116、2000年5月
  37. 「男女同形だった日本人の衣服」、朝日新聞社『AERA MOOK』日本史がわかる、pp.69～72、2000年12月
  38. 「聖徳太子のかたち—絵画・彫刻からの太子イメージを探る—」、大和書房『聖徳太子の実像と幻像』、pp.143～166、2001年1月
  39. 「環日本海 美の交流」、青柳正規・ロナルド・トビ共編『日本海学の世紀2—還流する文化と美—』、角川書店、pp.60～67、2001年4月
  40. 「メル友共同体」、朝日新聞社『一冊の本』、pp.19～21、2001年4月
  41. 「衣服からみた女王・女帝」、大阪外国語大学女性研究者ネットワーク編（代表武田佐知子）『地球のおんなたち—20世紀の女から21世紀の女へ—』、嵯峨野書院、pp.2～9、2001年5月
  42. 「古代社会における法衣の意味—道鏡の裳」、大法輪閣『大法輪』5月号、pp.93～97、2002年5月
  43. 「衣服で読み直す古代奈良」、シルクロード学研究センター『シルクロード学研究叢書』第7号、pp.31～38、2002年11月
  44. 「若手研究者への手紙」、日本学術振興会『学術月報』巻55-1(686号)、pp.116、2002年1月
  45. 「洗濯休暇があった古代の衣料事情」、『AERA MOOK 古代史がわかる』、朝日新聞社、

- pp. 93～95、2002年8月
46. 「お墓と戒名あれこれ 母の思い出によせて」、大法輪閣『大法輪』10月号、pp. 93～95、2002年10月
  47. 「「唐本御影」と太子信仰—太子像をよみとく—」、斑鳩文化協議会『二十一世紀は聖徳太子に学ぼう (三)』、pp. 29～54、2003年4月
  48. 「本棚のニューフェイス 佐原真『考古学つれづれ草』」、国際航業株式会社『文化遺産の世界』第8号 特集：遺跡を護るpp. 24、2003年2月
  49. 「三千年紀の「ジェンダー考古学」」、国際航業株式会社『文化遺産の世界』11号 特集：佐原真が遺したもの、pp. 12～13、2003年11月
  50. 「中之島界隈の歴史的建造物と母の日記」、大阪市教育委員会『大阪の歴史と文化財』第11号、pp. 24～28、2003年3月
  51. “Bekleidung-Eine kleine Geschichte der Hose”, Reiss-Engelhorn-Museen, *Zeit der Morgenröte, Japans Archäologie und Geschichte bis zu den ersten Kaisern*, 2004, pp. 456～459
  52. 「古代女帝の衣装」、山川出版社『歴博フォーラム 王の墓と奉仕する人びと』、pp. 179～197、2004年4月
  53. 「宮尾本平家物語 文庫本解説」、朝日文庫『宮尾本源氏物語』四 玄武の巻、pp. 622～627、2006年6月
  54. 「ベトナム紀行」、中辻正浩 薊の会『あざみ』第19号、pp. 22～27、2006年4月
  55. 「銀の道が運んだワニ」、岩波書店『図書』第699号、pp. 16～19、2007年6月

## 中岡成文教授 略歴・研究業績

### ■履歴（略歴）

#### 学 歴

1969（昭和44）年3月	広島学院高等学校卒業
1969（昭和44）年4月	京都大学文学部入学
1973（昭和48）年3月	京都大学文学部哲学科卒業
1973（昭和48）年4月	京都大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程入学
1975（昭和50）年3月	同上修了（文学修士）
1975（昭和50）年4月	京都大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程入学
1978（昭和53）年3月	同上単位習得満期退学

#### 職 歴

1980（昭和55）年4月	福岡女子大学文学部専任講師（哲学担当）（1981年3月まで）
1981（昭和56）年4月	福岡女子大学文学部助教授（哲学担当）（1987年3月まで）
1987（昭和62）年4月	大阪大学教養部助教授（哲学担当）（1994年3月まで） うち1993.4 - 1994.3は文学部講師（併任、大学院担当）
1994（平成6）年4月	大阪大学文学部助教授（倫理学担当、大学院担当）
1996（平成8）年9月	大阪大学文学部教授（倫理学・臨床哲学担当）
1999（平成11）年4月	大阪大学大学院文学研究科教授（臨床哲学担当、現在に至る）
2001（平成13）年4月	大阪大学医学系研究科教授（兼任）（医の倫理学担当） （現在に至る）
2005（平成17）年4月	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター長（兼任） （2007年3月まで）

### ■主要業績（2014年1月現在）

#### I 著書（すべて単著）

1. ハーバーマス —— コミュニケーション行為、講談社、1996年12月、308p.
2. 私と出会うための西田幾多郎、出窓社、1999年10月、197p.
3. 哈貝馬ス —— 交往行為（中国語）、王屏訳、河北教育出版社（北京）、2001年8月、262p.
4. 臨床的理性批判、岩波書店、2001年10月、203p.

5. パラドックスの扉 (双書・哲学塾)、岩波書店、2007年12月、148p.
6. 試練と成熟——自己変容の哲学、大阪大学出版会、2012年4月10日、iv+215p.

## II 編著

1. ヘーゲル哲学の現在、世界思想社 (共編)、1988年12月、284p.
2. 地域のロゴス、世界思想社 (共編)、1993年5月、291p.
3. システムと共同性——新しい倫理の問題圏、昭和堂 (共編)、1994年11月、300p.
4. 西洋哲学史 [近代編]——科学の形成と近代思想の展開、ミネルヴァ書房 (共編)、1995年4月、308p.
5. 知のパラドックス、岩波新・哲学講義・第3巻、岩波書店 (責任編集)、1998年1月、219p.
6. 戦争責任と「われわれ」——「歴史主体」論争」をめぐる、倫理学のフロンティア VI、ナカニシヤ出版 (共編)、1999年6月、254p.
7. 臨床と対話——マネジできないもののマネジメント、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科2002・2003年度報告書第7巻 (責任編集)、2003年12月、267p.
8. 生命、岩波応用倫理学講義・第1巻、岩波書店 (責任編集)、2004年7月、267p.
9. 臨床と対話、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書2004-2006文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科・コミュニケーションデザイン・センター第8巻 (責任編集)、2007年1月、246p.
10. 岐路に立つ人文学、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書2004-2006文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科・コミュニケーションデザイン・センター第1巻 (編集)、2007年1月、235p.
11. フロイト全集第8巻 (「機知——その無意識との関係」)、中岡成文他訳、岩波書店 (責任編集)、2008年2月28日、329p.
12. ドキュメント臨床哲学 (シリーズ臨床哲学 第1巻)、鷺田清一監修、本間直樹と共編、大阪大学出版会、2010年9月、282p.

## III 論文

1. 若きヘーゲルの書きものにおける人格・静安・記憶等のモチーフ、『哲学論叢』第3号、京都大学哲学論叢刊行会編、1976年4月
2. 解釈学と精神分析、『哲学』第28号、日本哲学会編、1978年5月



3. 解釈学と弁証法、『思想』第659号、岩波書店、1979年5月
4. 解釈学的循環と弁証法的発展、『理想』第561号、理想社、1980年2月
5. ヘーゲルにおける絶対性のアスペクトとしての深処、『立命館文学』第424・425・426合併号、立命館大学人文学会編、1980年12月
6. 看護論についての哲学的ノート、『看護教育』第21巻第12号、医学書院、1980年12月
7. 近代市民社会とそのイデオロギーに対する批判——ヘーゲル・フランクフルト草稿を中心として、福岡女子大学文学部紀要『文芸と思想』第45号、1981年1月
8. 否定性と規範——ヘーゲル哲学における実践的なもの、『思想』第684号、岩波書店、1981年6月
9. 西田哲学における<弁証法的論理>、『思想』第725号、岩波書店、1984年11月
10. Zur Differenzfrage. H. Tanabes Philosophie des Absoluten Nichts, Philosophisches Jahrbuch, Bd.92, Freiburg/München, 1985年4月, 124-125.
11. 対話と実践、新岩波講座哲学・第10巻、岩波書店、1985年9月
12. Das Nichtidentische und das Nichts. Aspekte des Negativitätsdenkens in Ost und West, Wiener Jahrbuch für Philosophie, Bd.XVII, Wien, 1985年12月, 109-121.
13. 行為とコミュニケーションにおけるいくつかの<差異>について、『哲学』第36号、日本哲学会編、1986年5月
14. 解釈学、竹市明弘他編『哲学とは何か——その歴史と可能性』、勁草書房、1988年2月
15. 意味と主体のポジション、『理想』第638号、理想社、1988年4月
16. 討議倫理学ノート、日本倫理学会論集23『倫理学とは何か』、慶應通信、1988年10月
17. 意識・経験・自己意識、加藤尚武他編『ヘーゲル哲学の現在』、世界思想社、1988年12月
18. コミュニケーションの戦略、現代哲学の冒険14『浮遊する意味』、岩波書店、1990年6月、75-149.
19. 精神のエロス、原田平作他編『性のポリフォニー』、世界思想社、1990年9月
20. ポスト構造主義の冒険、里見軍之編『現代思想のトポロジー』、法律文化社、1991年3月
21. 精神という実験（その他）、今村仁司責任編集『トランスモダンの作法』、リプロポート、1992年6月
22. 西田哲学と知の悲しみ、『現代思想』第21巻第1号、1993年1月
23. エスニックな哲学？、大峯顕他編『地域のロゴス』、世界思想社、1993年5月、269-278.

24. ヘーゲルとニヒリズムの課題、『現代思想』第21巻8号、1993年7月
25. 解釈のテロス——意味の解体／再構成、岩波講座・現代思想9『テキストと解釈』、1994年3月
26. 倫理学——システム論ののちに、佐藤康邦他編『システムと共同性』、昭和堂、1994年11月、41-64.
27. 理性の記憶——ヘーゲルにおける〈被りしもの〉の変容、鍛冶哲郎他編『経験と言葉——その根源性と倫理性を求めて』、大明堂、1995年3月
28. 弁証法の冒険（その他）、宗像恵他編『西洋哲学史 [近代編]』、ミネルヴァ書房、1995年4月
29. 理性の発明、『アルケー 1995』（関西哲学会年報No.3）、1995年6月、151-160.
30. 西田哲学と弁証法、大峯顕編『西田哲学を学ぶ人のために』、世界思想社、1996年2月
31. 痛みと身体・痛みと自己、『メンタルケア』第2号、ライブストーン社、1997年4月、102-107.
32. 否定性と支配——ヘーゲルにおける知識と行為、『西日本哲学年報』第5号、1997年10月、1-13.
33. 〈境界〉の制作——30年代思想への接近、『思想』第882号、1997年12月、49-68.
34. 講義の七日間——知るということ、中岡成文（責任編集）『知のパラドックス』（岩波新・哲学講義・第3巻）、岩波書店、1998年1月、1-60.
35. 信仰は市民生活を越えられるのか、佐藤康邦他編『モラル・アポリア——道徳のディレンマ』、ナカニシヤ出版、1998年2月、213-221.
36. 種の論理——田辺元、常俊宗三郎編『日本の哲学を学ぶ人のために』世界思想社、1998年6月、58-88.
37. モラルある理性へ、中岡成文他『哲学に何ができるか』（〈岩波新・哲学講義〉別巻）、1999年2月、3-26.
38. 理解と援助のパラドックス、『臨床哲学』創刊号、1999年3月、12-19.
39. 排除しない思考は可能か、安彦一恵他編『戦争責任と「われわれ」』、ナカニシヤ出版、1999年6月、99-114.
40. ケアする欲求、欲求するケア——臨床哲学のために、『メタフィシカ』第30号、大阪大学大学院文学研究科哲学講座、1999年12月、141-153.
41. ヘーゲルにおける表出と癒しのエコノミー——科学研究費補助金（平成10年度～11年度）基盤研究（B）（1）（研究代表者・鷺田清一）研究成果報告書『倫理学のアカウントビリティ』、2000年3月、86-95.

42. 環境課題を問う —— 哲学の視点から、環境情報科学30巻1号、2001年3月、43-47.
43. 考えにくい死を考える —— 哲学のまなざし、『生と死の文化史』(懐徳堂ライブラリー 4) 懐徳堂記念会編、和泉書院、2001年6月、55-85.
44. 田辺元 —— 絶対否定は何を差異化するか、藤田正勝編『京都学派の哲学』、昭和堂、2001年7月、52-65.
45. いかなる哲学のための、いかなる教育か、『アルケー』(関西哲学会年報) 9号、2001年7月、142-151.
46. 医療におけるコミュニケーションと「ソクラテス的対話」、『医療・生命と倫理・社会』第1号、大阪大学大学院医学系研究科・医の倫理学教室、2002年3月、14-21.
47. 人為與自然 —— 20-30年代的杜威與三木清、卞崇道、藤田正勝、高坂史朗主編『中日共同研究：東亜近代哲学的意義』、沈阳出版社、2002年8月、151-161.
48. 人為と自然 —— 1920-30年代におけるジョン・デューイと三木清、藤田正勝、卞崇道、高坂史朗編『東アジアと哲学』、ナカニシヤ出版、2003年2月、86-94.
49. <精神の力>としての権利 —— ヘーゲルのRecht論に寄せて、『倫理学研究』第33集、関西倫理学会、2003年3月、31-44.
50. 看護倫理教育プログラムを考える —— ミネソタ大学カリキュラムの検討、『医療・生命と倫理・社会』第2号、大阪大学大学院医学系研究科・医の倫理学教室、2003年3月、165-173.
51. 表現と制作 —— 西田幾多郎と三木清のデイルタイ批判、『デイルタイ研究』第14号、日本デイルタイ協会、2003年11月、5-18.
52. もの・ひと・とき —— 「臨床と対話」のために、中岡成文責任編集『臨床と対話 —— マネジできないもののマネジメント』、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科2002・2003年度報告書第7巻、2003年12月、10-22.
53. SDは社会的・政治的イシューに適用できるか —— ウィーンの異種移植SDに参加して、平成14・15年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))(研究代表者・中岡成文)研究成果報告書『公共的対話を深めるための哲学的方法論 —— ソクラテイク・ダイアローグを中心として』、2004年3月、7-14.
54. 講義の七日間 —— 生命に肉薄する言葉、中岡成文(責任編集)『生命』(岩波応用倫理学講義・第1巻)、岩波書店、2004年7月、1-63.
55. Logika vrste, Filozofska Istrazivanja 96 (God. 25 Sv.1), Zagreb 2005年1月、41-53.  
(上記36のクロアチア語抄訳)

56. 1930年代の科学論——京都学派とバシユラルを中心に、平成14～16年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））（研究代表者・溝口宏平）研究成果報告書『哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション』、2005年3月、52-62.
57. 痴呆と家族、平成16年度京都市高齢者介護等調査研究事業報告書、京都市社会福祉法人社会福祉協議会・京都市長寿すこやかセンター発行、2005年3月、22-26.
58. 何をいかにアドヴォケートするか——臨床哲学の試み、『臨床哲学の可能性』（研究代表者／野家啓一、高等研報告書0207）、（財）国際高等研究所、2005年3月、25-43.
59. 「臨床哲学とケア」、川本隆史編『ケアの社会倫理学——医療・看護・介護・教育をつなぐ』第6章「臨床哲学とケア」、有斐閣選書、2005年8月、181-200。（堀江剛と共著）
60. 科学論から1930年代を見る——下村寅太郎の思想を中心に、『日本思想史学』第37号、2005年9月、20-28.
61. 理解と援助のむずかしさ、メンタルケア協会編『メンタルケア論2』、慶應義塾大学出版会、2005年11月、201-214.
62. 〈迎え入れ〉、承認、対話、平成15～17年度科学研究費補助金（基盤研究（B））（研究代表者・鷺田清一、紀平知樹）研究成果中間報告書『擬似法的な倫理からプロセスの倫理へ——「生命倫理」の臨床哲学的変換の試み』、2006年3月、97-109.
63. 現場力の学問化に向けて、『臨床と対話』（大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」研究報告書2004-2006文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科・コミュニケーションデザイン・センター第8巻）、2007年1月、13-26.
64. 哲学的説明——規定と限定、『岐路に立つ人文科学』（大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」研究報告書2004-2006文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科・コミュニケーションデザイン・センター第1巻）、2007年1月、183-194.
65. 「対話」は対立を乗り越えられるか（1）——ウィーンの異種移植SDに参加して、『コミュニケーションと現代社会』平成16年度～平成18年度広域文化形態論講座共同研究報告書（研究代表者・広域文化形態論講座教授・中岡成文）、2007年3月、135-142.
66. 「対話」は対立を乗り越えられるか（2）——公共的イシューへのSD適用、『コミュニケーションと現代社会』平成16年度～平成18年度広域文化形態論講座共同研究報告書（研究代表者・広域文化形態論講座教授・中岡成文）、2007年3月、143-149.
67. ヘーゲル承認論における「ひと」と「もの」の媒介関係——イェナ精神哲学を中心に、『メタフュシカ』大阪大学大学院文学研究科哲学講座、2007年12月、13-24.
68. コミュニケーションと自己変容：序説、平成16～19年度科学研究費補助金（基盤研究（B））『新しい公共的対話モデルの有効性の検討』（研究代表者・中岡成文、課題番号

- 16320005) 研究成果報告書、2008年3月、11-42.
69. 日本の遺伝子診療の現状と課題——「遺伝子診療とその社会文化的側面についてのアンケート調査」から、工藤直志、岩渕亜希子、霜田求、西村ユミと共著（第4オーサー）、『医療・生命と倫理・社会』第7号、2008年3月、13-66.
  70. 経験批判としての臨床哲学、『岩波講座哲学1』岩波書店、2008年6月、233-251.
  71. いま、看護倫理教育に求められる視点、『看護展望』第33巻第10号、メジカルフレンド社、2008年9月25日、12-18.（大北全俊と共著）
  72. 展望 知識／情報のインターフェイスへ、『岩波講座哲学4』岩波書店、2008年10月、1-13.
  73. 弱さの構築——死生の臨床哲学へ、『死生学研究』特集号「日中国際研究会議 東アジアの死生学へ」、東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」、2009年3月25日、178-192.
  74. (73の中国語訳) 虚弱性的建構——生死的臨床哲学探討、『中日国際学術研討論文集——東亜生死学』、東京大学大学院人文社会系研究科、2009年3月30日、104-113.
  75. Akiko Iwabuchi / Tadashi Kudoh / Motomu Shimoda / Narifumi Nakaoka / Yumi Nishimura, Current Situation and Issues of Genetic Medicine in Japan : From the Questionnaire Survey on Genetic Medicine and its Sociocultural Aspects, オンライン版、2009年5月 <http://www.ihs.ac.at/steps/genialog/ergebnis.html>
  76. What Does Clinical Philosophy Practice ?, in: Monthly Review of Philosophy and Culture (哲学與文化), No. 428, 輔仁大学編集、哲学與文化月刊雑誌社発行、2010年1月、49-61.
  77. 「区切りをつけること——臨床哲学をどう語るのか」、鷺田清一監修、本間直樹・中岡成文編『ドキュメント臨床哲学』、大阪大学出版会、2010年9月、2-14.
  78. 「さまざまな現場への取り組み——介護、ケアと臨床哲学』、『ドキュメント臨床哲学』、前掲、32-36.
  79. 「現代社会の組織／運動としての臨床哲学』、『ドキュメント臨床哲学』、前掲、158-166.
  80. 「知ること／動くこと』、『ドキュメント臨床哲学』、前掲、167-177.
  81. 「誰の声を聞くか——医療におけるコミュニケーションデザイン——」、『日本語学』第30巻第2号、明治書院、2011年2月、54-63.
  82. 「臨床哲学』、戸田山和久・出口康夫編『応用哲学を学ぶ人のために』、世界思想社、第8章「市民と向き合う哲学」所収、2011年5月、274-284.
  83. Self-transformation and Its Philosophical Support, in: Monthly Review of Philosophy

- and Culture (哲学與文化), No. 446, 輔仁大学編集、哲学與文化月刊雜誌社發行、2011年7月、3-20.
84. 「自我轉化及哲学支持」、曾立芳訳、Monthly Review of Philosophy and Culture (哲学與文化) No. 446, 輔仁大学編集、哲学與文化月刊雜誌社發行、2011年7月、21-33. (論文83の中国語訳)
85. 「遺伝子検査の規制枠組みと商業的遺伝子検査の関連：欧州（ドイツ語圏）」、平成21～23年度科学研究費補助金（基盤研究（B））『「体質遺伝子検査」技術に関する社会ネットワークと社会的認識の調査研究』（研究代表者・山中浩司、課題番号21330117）研究成果報告書、2012年3月、37-41.
86. 「体質遺伝子検査についての関係者の見解——認定遺伝カウンセラーの見解」、平成21～23年度科学研究費補助金（基盤研究（B））『「体質遺伝子検査」技術に関する社会ネットワークと社会的認識の調査研究』（研究代表者・山中浩司、課題番号21330117）研究成果報告書、2012年3月、106-125.
87. 「自己変容を援助する思想」、財団法人メンタルケア協会編『精神対話論』、慶應義塾大学出版会、2013年3月30日、381-399.
88. Self Technology and Clinical Philosophy: Potentials of *Yōjo* Concepts Today, in: 余安邦主編、身體、主體性與文化療癒、第四屆國際漢學會議論文集、中央研究院、台北、2013年11月、48-72.